

名誉顧問のコモンセンス

二律背反 表裏論 10

道歌か、古語か？

その2ー古語篇



その2 古語編

独自の解釈 報徳先生は、四書五経を諳んじているほど、よく読んでいます。それを生涯の指針として生きてきました。でも、そこには、先生特有の読み方があります。古典本に記された注釈や学者の意見に従わず、自分独自の解釈で理解したものが多いのです。なぜでしょうか？ それは、先生が施政家であり、農本家であり、実学者であったからです。本に書かれたすべてのことを、自分が農業から得た体験を元に解釈したからです。そして、その学問上の知識を、農民たちに、日々の作業として教え、共同体の志として諭し、村々で実施したのです。そのことを、先生、自ら次のように説明しています。

1 我道 卑近を尊ぶ

【『二宮翁夜話』第二百三十話:209頁】

翁はこう言われた — 「老子や仏家の教えは高尚である。たとえば、日光・箱根などの山岳のけわしくそびえ立っているようなものだ。雲水は美しく、風景は楽しむべきだ

が、生民のためには効用が少ない。私の道は、平地村落のひなびているようなものだ。風景に美しいものもなく、雲水の楽しむものもないが、すべての穀類が湧き出すところで、国家の富源はここにあるのだ。仏家の名僧の清浄なことは、たとえば浜の真砂のようだが、私の方は泥沼のようだ。しかし蓮花は浜の砂には生じないで汚れた泥土に生ずる。大名の城のりっぱなもの、市中の繁華なもの、財源は村落にある。これで、**まことの道は卑近にあって高遠にはなく、実徳は卑近にあって高遠にはなく、卑近は決して卑近ではない** 道理を悟るべきだ。

なるほど。では、その先生の「古語解釈」の卑近な例をいくつかご紹介しましょう。

飯高某に教訓 道心と人心

2 柯を取って 柯を伐る

【『二宮翁夜話』第三十八話:34頁】

この「夜話」は、ずば抜けて面白いお話です。ここには、報徳先生の古典に対する学識の深さとさらに古典への高度な理解の素晴らしさとそれから学んだ人格の潔さとそれを越えた人情味ある情感の深さとその上にユーモアさえもあります。「夜話」の中でもこのお話は絶品です。

浦賀の人で飯高六蔵は多弁の癖があった。暇を乞うて国に帰ろうというとき、翁は諭してこう言われた 一

善導の人 この「多弁の癖」が、そもそも曲者です。多弁な人は、自分の才能を自慢する一方、他人を批判するものです。きっと、六蔵はみんなの嫌われ者でしょう。その癖を、慈愛ある先生は、直してやろうというのです。須(すべか)らく、先生は、「善導の人」です。

「あなたが国へ帰ったら人に説くことを止めなさい。人に説くことを止めて、自分の心で自分の心に意見しなさい。自分の心で自分の心に意見するのは、**「柯(か)を取って柯を伐(き)る」**(斧の柄を作るのに現に持っている斧の柄を標準・見本にする:『詩経』)よりたやすい」。

「自分の心で自分の心に意見する」とは、なにを言っているのか、よく分かりません。「柯を取って柯を伐る」とどういう関係にあるのでしょうか。

「もともと自分の心だからだ。意見をするのはあなたの **道心**(私欲のない心) である。意見されるのはあなたの **人心**(私欲のある心) である。[自分の心は] 寝てもさめても、坐っても歩いても離れることがないから、行住・座臥(ぎょうじゅうざが: 日常の振る舞い)、油断なく、[まず、自分自身に] 意見をしなさい」。

自分に意見する ここでは、難しい内容が多い『詩経』から、更に難しい「古語」が引用されています。この『詩経』(しきょう)の言葉「柯を取って柯を伐る」は、まだ、このあとに「其の則(のり: てほん) 遠からず」とつづきます。全体の意味は、「斧(おの)の柄を作ろうと材料の枝を伐り取るのに、その枝の大小・長短は手元の斧の柄を手本にすればよい。

常によい手本となるものは身近にある ものだ」の意です。この古語を使って、先生は、「多弁なお前は他人に意見をするのが好きだが、これからは、他人にではなく、まず、自分に意見しなさい」と言うのです。特に、「自分の心は、寝てもさめても、坐っても歩いても離れることがないから、最も身近にあってお手本としては便利なものだ」ともいいます。

見事です。ここまでいわれたら、もう、いかな六蔵でも自分の多弁から逃げることはできません。この難しい古語の紹介と言い、この古語を選んだ発想と良い、それを利用して当意即妙に本人を諭(さと)してみせる話術といい、上手いものです。

逆転の発想 でも、また、『詩経』の古語を利用して、古語など聞いたこともない相手に向かって、道理を説くところなど、変わった考えをするものです。これも日頃の先生の主旨にそった指導法です。いえ、反対でした。先生は、日頃、「仁」を説く人でした。「仁」とは、「自分のことより、まず、相手のことを先にする」のですが、ここでは、「自分を先にして、相手をあとにしない」と反対をいっているのです。「自分の悪い性格を、先ず、直さなければ、他人はお前のいうことなど聞かない。まず、自分を先に説教しなさい」——ここが、先生の逆転の発想のすばらしいところです。「自分を先にして自慢の多弁を論ぜよ」には、ユーモアまで感じさせます。見事です。

「もし、[自分が] 酒が好きなら、多く飲むのを止めるように[自分に] 意見し、すぐに止めればよし、止めないときには幾度も意見しなさい。そのほか奢(おご)りの念が起きるときにも、安逸の欲が起きるときにも、みな同じだ。万事このように **みずから戒めればこれは無上の工夫** である。この工夫を積んで、自分の身が修まり家が斉(ととの)ったならば、これは自分の心が自分の心の意見を聞いたのだ。そのときになれば、あなたの言うことを聞く人もあろう。自分の身を修めて人に及ぶからだ。自分の心で自分の心を戒め、自分の心が聞かないようなら決して人に説いてはならない」。

これはなかなか、優れた教えです。特に、六蔵はだれに向かってても理屈を言うのですから、先生はそれを心配したのでしょう。また、この他人を批判し、忠告する癖のある六蔵の性格を利用して、「まず、自分の日頃の行動に照らしてから、他人に意見しなさい」と諭したのです。それでないと、商売にも差し障りがあるというのです。この「道心」と「人心」の区別は、分かり易い内容であり、言葉です。

先生は、日頃の六蔵の振る舞いから、この『詩経』の言葉を思い出したのでしょう。そのとき、この「柯」についての古語が直ぐに頭に浮かぶのは凄いです。先生は、あの大部で難解な『四書五経』をどれだけ、熱心に、丹念に読んだのでしょうか。学問に対して、驚くほどの才能と気力と志(こころざし)の持ち主です。それも、六蔵を戒めるのに最もふさわしい内容の「古語」が、立ち所に浮かぶのですからたいしたもの。単に、身上の義務として必要に応じて学問を学ぶ、並みの専門の学者でもこうはいきません。それも、この「柯」の諭(さと)しと相手の「多弁僻」を結びつけるところなど、天才的な発想です。

ついでに、先生は、商売のコツについても極意を伝授します。

「またあなたが家に帰ったなら商業に従事することだろう。土地柄といい、代々の家業といい当然のことだ。しかし、あなたは売買をしても、決して金をもうけようなどと思うな。ただ **商道の本意を勤めなさい**。商人たる者が商道の本意を忘れれば、目先の利益は得ても、終局は滅亡を招くだろう。よく商道の本意を守って努力すれば、財宝は求めなくても集まり、富貴・繁昌ははかりしれない。必ず忘れてはならない」。

ところで、ここでいう商売の本意とはなんのでしょうか？ 先生は、「金を儲けるな」といいますが、その理由まではいいません。でも、他の「夜話」で、たっぷり、語っていることでしょう。では、それを探しましょう。

嫌(きら)いな人はいない さて、私はこのお話が大好きです。このお話には、報徳先生のいいところがすべて出ているからです。主人公の六蔵は、多弁です。人のことを悪く言い、自分を自慢する、威張り者で、横着者で、村の嫌われ者です。でも、先生はそんな六

蔵を見捨てません。先生には、嫌いな人間は一人もいません。これは素晴らしいことです。「世の中で一番美しいのは、『私は嫌いな人は一人もない』と言う言葉です」と言ったのは映画評論家の淀川長治さんです。諭吉翁の周りには、諭吉翁が嫌う人ばかりいました。それは、怨望をする人たちと痩せ我慢をしない人たちでした。むろん、諭吉翁を理解し、愛し、支持する人は、当時の日本の人口 3500 万人の内の 160 人に一人はいました。そうです、『学問のすゝめ』の読者の数です。ここが、偉業を整えた資料としては『報徳記』と『二宮翁夜話』しかない報徳先生と諭吉翁の違いです。それでも、報徳先生が諭吉翁に伍(ご;肩を並べる)することが出来るのは、報徳先生への人望の厚さです。日本中の善人はすべて報徳先生の身方です。先生には、人に対する、差別も区別もありませんでした。悉皆(しっかい:すべて)、みんな仲間です。仲間に嫌われている人がいたら、その人を良い人へ「善導」するのが先生のクセでした。『夜話』には沢山の悪者が出てきます。怨望に満ちた役人たち、博奕好きで怠惰な農民たち、不寛容な領主たち。でも、先生は一人も嫌っていません。嫌ったり、悪口を言ったり、貶(おとし)めたりしません。かならず、他人からは守ってやり、本人には忠告して諫(いさ)めるのです。そして、すべてを善人に仕上げるのです。従ってこの『夜話』は、心を開いて、安心して善人仲間が読める良書の一つです。

富者と仁と譲

それでは次は、お待ちかねの「お金儲けの話」です。

3-1 一家・仁なれば、一国・仁 に興る。

【『二宮翁夜話』第三十八話:34頁】

嘉永五年(1852) 正月、翁が私(福住正兄:まさえ)の家の温泉に数日にわたって入浴された。私の兄大沢精一が翁に従って入浴したとき、翁は湯桁におられてこう諭された —

「世の中には、お前たちのような富者でありながら、みな十分であるにとを知らずに、あくまでも利をむさぼり、不足を唱えるのは、大人がこの湯船の中に立って、屈(こご)まないで湯を肩にかけて、『湯船がはなはだ浅い。膝にも達しない』と罵るようなものだ。もし湯をその望みのように深くすれば、小人・童子は入浴できないだろう。これは湯船が浅いのではなく、自分が屈まないのが過ちである。この過ちをよく知って屈めば、湯はたちまち肩に達して、おのずから十分になる。何も他に求めることはない。世間で富者が不足を唱えるのは、これとどこが違おう」。

富者と仁と譲 これも、先生の「富者への教え」です。直ぐつづいて「仁」の話が出てきますが、まず「仁」は、「自分のことよりも、相手のことを先に考える」です。自らが、相手に合わせて身を低くかがめれば、みんなでお風呂に入れます。お金持ちも、お金持ち同士で、税金とか、農民の会費とか、色々な負担金などを勝手に決めるのではなく、貧乏な人たちに合わせて決めなさいと言うのです。そして、その時には、相手に「譲」(ゆずる)ことも大切だ — とつづきます。

「分限を守らなければ千万石あっても不足である。一度、過分の過ちを悟って分度を守ったならば、余裕が自然にできて、人を救うに余りがある。湯船は大人は屈んで肩につき、小人は立って肩につくのを中庸とする。百石の者は五十石に屈んで、五十石の余裕を譲り、千石の者は五百石に屈んで、五百石の余裕を譲る。これが中庸だ。もし一郷のうち一人がこの道を踏んだならば、人々はみな分を越える誤りを悟ろう。人々がみなこの誤りを悟り、分度を守ってよく譲れば、一郷は富み栄え、平和になること疑いない。古語(『大学』)に「**一家・仁なれば、一国・仁に興る**」(一家に仁の道が実現されれば、国全体も仁に

興る)といっている。よく考えるべきだ」。

「分度を守れば、富み栄えること疑いない」と先生は、商売の極意をおしえます。

3-2 己に克って 礼に復れば 天下仁に帰す。仁をなす、己による。人によらんや。

「仁は人道の最高のものだが、儒者の説ははなはだむつかしくて用をなさない。近いところでたとえれば、この湯船の湯のようなものだ。これを手で自分の方に搔けば、湯はわが方に来るようだが、みな向うへ流れて帰る。これを向うへ押せば、湯は向うの方へ行くようだが、またわが方へ流れ帰る。少し押せば少し帰り、強く押せば強く帰る。これが天理だ。**仁といい、義というのは向うへ押すときの名だ。**わが方へ搔くときは不仁となり不義となる。慎まなくてははいけない。古語(『論語』顔淵篇)に「**己に克って礼に復れば天下仁に帰す。仁をなす、己による。人によらんや**」(自分にうちかって礼の規則にたちかえることができた天下の人々がその仁徳になびき集まるであろう。仁を实践するのは自分次第である。どうして他人をあてにすることがあろうか)とある。己とは手のわが方へ向くときの名だ。礼とはわが手を先の方へ向けるときの名だ。わが方へ向けては、仁を説いても義を述べても、みな無益だ」。

それは、そうでしょう。「仁」も「義」も、すべて、他人のためにするものですから。そのことを、先生は、手の構造から説明します。このように、先生の発想は自由自在で、身近なものを使って具体的です。だれにも、手があります。すぐに理解出来て、よく分かります。「我道 卑近を尊ぶ」です。

「よく考えてみなさい。まあ、人体の組み立てを御覧、人の手はわが方へ向いて、**わがために便利にできている** が、また向うの方へも向き、**向うへ押すようにもできている**。これが人道の原理だ。鳥獣の手はこれに反して、ただわが方へ向いて、自分に便利だけだ。だから人たる者は、他のために押す道がある。それを、自分自身の方へ手を向けて、自分のために取ることばかりを勤めて、先の方へ手を向けて、他人のために押すことを忘れるのは、人にして人でない。いってみれば禽獣だ。恥ずかしいことではないか。ただ恥ずかしいばかりでなく、天理に反するから、ついには滅亡する。そこで、自分が常に奪うには益がなく、譲るに益がある。譲るに益があって、奪うには益がない。これがすなわち天理だ。よくよく玩味するがよい」。

私たちも、毎日、手を見る度に、「仁」と「義」と「譲」を思いましょう。そうすれば、だれでも、多くの「益」を得て、天下を良くすることが出来ます。それが、報徳先生の理想です。

仁義礼智の事

4-1 人の性は 仁・義・礼・智 である

【『二宮翁夜話』第二百十八話:199頁】

また、「癖」のある門人の話です。

門人の某は居眠りの癖があった。それで翁はこう言われた — 「人の性は 仁・義・礼・智である。下愚の者でもこの性がないことはない。お前たちも必ずこの性があるから、

智がないということはない。それを無智であるのは磨かないからだから、まず道理の片はしでも弁(わきま)えたい、覚えたい、と願う心を起こすがよい。これを願(がん)を立てるといふのだ。この願を立てれば、人の話を聞いて居眠りはできなからう。

まぜ、先生は、居眠りをしない秘訣について話します。「まず、道理を知りたいと願(がん)をかけることだ」といいます。そして、「仁・義・礼・智に進むのだ。そのために、家を作るつもりになって、道理を身につけることを考えよ」といいます。

「仁・義・礼・智」を家にたとえれば、仁は棟、義は梁(はり)であり、礼は柱、智は土台である。だから家の講釈をするのに、棟・梁・柱・土台 といってもよい。家を作るには、まず土台をすえ、柱を立て、梁を組んで棟を上げるように、講釈だけするには、仁・義・礼・智といえばよい。これを実行するには、智・礼・義・仁の順序で、まず智を磨き、礼を行ない、義を踏み、仁に進むべきだ。それゆえ『大学』には、智をきわめることを初歩としている。

「道理」を知るには、まず、「智」を極めることだそうです。急には「智者」にはなれないが、多少の効果はあるだろう。馬鹿なことをしなければ、智者とも言える。

「瓦は磨いても玉にはならない。しかし幾分かの光を生じ、かつ、なめらかにはなる。これは学びの徳である。また無智の者はよく心がけて、馬鹿なことをしないようにするがよい。生まれつき馬鹿でも、馬鹿なことさえしなければ馬鹿ではない。智者でも馬鹿なことをすれば馬鹿であろう」。

居眠りするは人の常 同じようなお話が、『徒然草』(三十九段)にもあります。

或人、法然上人(ほうねんしょうにん)に、「念仏の時、睡(ねむり)にをかされて、行を怠り侍る事、いかゞして、この障(さわり:障碍)りを止め侍らん」と申しければ、「目の醒めたらんほど、念仏し給へ」と答へられたりける。いと尊かりけり。

学校の先生にも、このお話を聞かせたいものです。

天道の人・上人 同じ居眠りをするにしても、報徳先生と法然上人では対応が違います。法然上人はさすが偉いお坊さんで、先ず、人の過ちを咎(とが)めません。心ゆるやかに、心温かに、大きな心で許します。「心の人」です。風のように吹きたいときに吹き、雨のように降りたいときに降り、疲れた人のように眠りたいときに寝る ― それを許す人です。なんだか嬉しいです。お上人さまはさすが「天道の人」です。

人道の人・現場監督 ところが、報徳先生は違います。困っている人から教えを請われたら、必ず具体的な答えを出す人です。悩んでいる他人(ひと)を救う「仁の人」です。それでないと、困っている相手を実際に助けることになりません。人間は、居眠りしてはいけません。常に働かなければ、豪雨のために川の堤防は崩れ、強風のために木や家が倒れたままであり、安心して生きてはいけません。災害は災害であって、過ちは過ちであって、それを直すことを人々に強いるのです。この思いをもった報徳先生は、「人道の人」です。ここが、心のまます宗教家とあくまでも働きを強いる実務者との違いです。仕事中に居眠りされては困ります。報徳先生は現場監督ですから、人に勤勉・謹直・勤労を強いるのです。それがその人のためなのです。

このように、一つの問いに対して、二通りの答があります。どちらの答えも正しいのです。でも、この違いは相手の立場の違いです。「二律背反表裏論」です。相手によります。相手が修行中の法師ならば法然上人の答でいいでしょう。でも、相手が日々農作に励む農民

であるならば、報徳先生の答でなければなりません、

天道と人道の別について、翁はこう言われた — 「天道は自然に行なわれる道であり、人道は人が立てた道である。もとからはっきり別々のものであるのに、一つにするのはまちがいだ。 **人道は努力して人力で維持して、自然に流動する天道に押し流されないようにすることだ。** 天道にまかせておけば、①堤は崩れ、②川は埋まり、③橋は朽ち、④家は立ち腐れになる。人道はこれに反して、①堤を築き、②川をさらい、③橋を修理し、④屋根をふいて雨のもらないようにするのだ。身の行ないもまたこれと同じである。天道は、①寝たければ寝て、②遊びたければ遊び、③食いたければ食い、④飲みたいければ飲むというようなものだ。人道は、①眠りたいのを努力して働き、②遊びたいのを勇氣をおこして戒め、③食いたいうまい物も我慢をし、④飲みたい酒もひかえて明日のために物を貯える。これが人道だ。よく考えなさい。 【『二宮翁夜話続編』第一話・221頁】

「天道と人道とは、元々、このように異なるものだ」と知った上でする報徳先生の古典解釈は、並(な)べて実務的なものです。これはこれでいいのです。一つの疑問に対して、その答えは、決して同じものではあるとは限りません。人道に生きる報徳先生の場合は、**「柯を取って柯を伐る」**であり、**「我道 卑近を尊ぶ」**のですから、当然、独自のものであるはずです。

世俗的で庶民的 この「天道と人道」との違いに、社会の分断や区別や差別を見ることが出来ます。報徳先生の「人道説」は、いまでいう一般大衆向きの「ポピュリズム」(populism)に似ています。当然、大衆の立場から、時の既成の権力構造や富裕なエリート層や学識者を批判するものです。でも、報徳先生ご自身は、権力もあり、財産もあり、優れた学識もあるエリート中のエリートです。法然上人や諭吉翁と同格です。その点では、立派なものです。決して、普通に言う大衆迎合主義的な「ポピュリスト」(populist)ではありません。一般の人々に、人一倍、勤勉・勤労・節約・推譲・仁を強いるのですから、迎合的ではありません。それに、先生は、物事を分かり易く、丁寧に、直ぐ手の届くところへ置きます。自作の道歌がそうです。いってみれば、大衆的であるよりも、世俗的で、庶民的なのです。今でいう「ポピュリスト」とは違います。「コモン的」(共同体的)なのです。

智の実践

お話をまた、古典の「仁・義・礼・智」にもどしましょう。人間、この「仁・義・礼・智」があるだけでは、立派な人間とはいえません。それを、どう、実践するかです。以下のお話は、本人が学問や道理をよく知っていても、馬鹿な行いをして、その権威を犯した行為についてです。すなわち、智者が馬鹿なことをした失敗談です。

4-2 俗儒者の失行

【『二宮翁夜話』第七十一話:七十四頁】

俗な儒者があって、翁の愛護を受けて儒学を子弟に教えていた。ある日、近村に行って大酒を飲み、酔って道ばたに寝て、醜態をきわめた。弟子の某氏の子がこれを見て、翌日から教えを受けなくなった。

儒者は怒って、翁に — 「私の行ないが善くないのは言うまでもありませんが、私が教えているのは聖人の書です。私の行ないが悪いのを見て、いっしょに聖人の道を捨てるといふ理由はありません。どうかあなたから説諭して、また勉強に来るようにしてください

い」と願った。

翁は言われた — 「そう怒らないがよい。私がたとえをもって解説しよう。ここに米があって、飯にたいて糞桶(くそおけ)に入れたら、あなたはそれを食べますか。もとは清浄な米飯には違いない。ただ糞桶に入れただけだ。しかし、これを食べる者はいない。食うのは犬だけだ。あなたの学問もこれと同じだ。もとは立派な聖人の道ではあるが、あなたが糞桶の口から講説するから子弟たちは聴かないのだ。聴かないのが理にあわないと言えようか。あなたは中国の産だと聞いている。だれに頼まれてここへ来たのか。また何の用事で来たのか。いったい家を出ないで教えを国中にひろめるのが聖人の道だ。今は〔故国の家を出て〕ここへ来て私の食客になっている。それは何のためか。食べるだけならば〔自国で〕農商をやれば十分だ。あなたは何故に学問をしたのか」。

「糞桶からの講説」とは、また先生も、大胆なことをいったものです。この「糞桶」のたとえは強烈です。ここでの「糞桶」とは、広くいえば、独裁者が武力で独占している地位のことでもあり、会社の社長がインサイダー取引で得た株数で維持している権利のことでもあり、悪徳政治家が不正な選挙で勝ち得た身分のことでもあり、異国の古い儒学についての小難しい学識のことでもあります。この慢心になり、自らを聖人だと思い、思い昂(たか)ぶっていた子弟の一人は、ここにおいて初めて、「これは本当の聖人の道ではなかった」と真の学問に目覚め、志を改めたのでした。

儒者は — 「私は間違っていました。私はただ〔祖国に錦を飾ろうと〕人に勝つことばかりを望んで読書をしていたのです。私は間違っていました」と言って、感謝して帰って行った。

この弟子は、きっと、先生の教えを広めに祖国に帰ったことでしょう。めでたし、めでたし。

【2025/07/17 都築正道】